ＯＮ　Ｔｈｅ　Ｗａｙ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮ　Ｔｈｅ　Ｗａｙ

【Ｎコード】
Ｎ６６１７Ｋ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
アメリカのハイウェイで気ままなトラック稼業を続ける俺達。その楽しい生き方は。チェッカーズシリーズ第四十九弾、これも名曲でした。

第一章

ＯＮ　Ｔｈｅ　Ｗａｙ

「おいこら止まれ！」
「止まれって言われてな」
「そう簡単に止まれるかよ！」
周りが赤い岩山だらけのハイウェイを進みながら後ろから来るパトカーに言い返してやった。
「こっちは仕事なんだよ」
「それで止まれるかってんだ」
「そんなことは関係あるか！」
パトカーから若いポリスの声がしてきた。
「交通違反だろうが！スピード違反だ！」
「スピード違反？馬鹿言え」
「ステイツにやそんなものねえよ」
俺達はでかいトラックの席から言ってやった。今俺達はこの荒野のハイウェイを全速力でかっ飛んでいる。それこそこれこそトラック野郎の夢のやっと買えたそのトラックで今走っていた。
仕事の積荷は満杯だがそれが俺達の流儀だ。積めるだけ積んでそれを運んでやる。それもアメリカならどんな場所でもあっという間だ。
「だから放っておいてくれよ」
「後でハンバーガー奢るからよ」
「本官を買収する気か！」
今の言葉にはこう返してきてくれた。
「許さんぞ！コーラ一杯でも受け取るか！」
「じゃあそうしなよ」
「また糞真面目な警官だな」
「糞真面目で結構！」

リアルで言葉を返してきてくれた。どうやら後ろでがなっている若い警官はそれが誇りのアメリカには昔から珍しい所謂本当の保安官らしい。
「止まれ！早く止まれ！」
「おいベイブ」
「わかってるぜジョニー」
俺達はトラックの席で笑みを浮かべて顔を見合わせて話した。
「もうすぐ州境だ」
「飛ばすか」
「ああ、そうしようぜ」
こう言い合ってさらに飛ばした。それでもう後ろのポリスは見えなくなった。というか追っては来れなくなった。州の警察は違う州には入れないからだ。
こうしてポリスは振り切ってふと外を見た。するとこには。
「いいねえ」
「センスあるねえ」
荒野のハイウェイの横にあるピンナップを見てにやにやと笑った。そこには赤いハイレグのブロンドの美女がウィンクしていた。こういうのがないとハイウェイのドライブも楽しくない。
それを見てにやにやしてピンナップの横を通り過ぎる。それから俺達はまた話をした。
「昼どうする？」
「昼飯か」
「それだよ。何食うんだ？」
こう話をした。
「またあれか？コーラにハンバーガーにするか？」
「チキンナゲットでもいいんだがな」
「それかサンドイッチか」
とりあえず思いつくものを出し合った。
「何か食わないと身体がもたないしな」

「っていうか食うこと自体が楽しいしな」
「ははは、そりゃな」
俺は相棒のその言葉に顔を崩して笑った。
「その通りだな。確かにな」
「じゃあ楽しく何食う？」
「次のピットインに入って決めるか」
「そうするか」
そんな話をしてからそのピットインに入った。外観は洒落たレストランの席に座ってウェイトレスの女の子に注文する。出て来たのはピンクのミニスカートに白いエプロンの可愛い娘だった。髪は茶色で目は青だ。顔のそばかすも初々しい感じで実にいい。
気に入ったので声をかけた。勿論ダイレクトにだ。
「なあ、今度デートしないか？」
「あら、もう間に合ってるから」
けれど女の子はとても慣れた口調で俺に返してくれた。
「残念だったわね」
「へっ、そりゃどうも」
そう言われてわざと口を歪めて笑ってみせた俺だった。

第二章

「じゃあばいばいってわけだ」
「そうよ。ばいばい」
「けれど注文は聞いてくれるよな」
「それが仕事だからね」
この辺りはしっかりしていた。女の子は楽しく笑って俺と相棒に言ってきた。
「それで何にするの？」
「ジャパニーズヌードルとサンドイッチにするか」
「じゃあ俺もだな」
メニューを見てすぐに決めた。何かこのジャパニーズヌードルってやつがかなり気になったからそれを注文することにしたってわけだ。
「それ頼むな」
「すぐにな」
「わかったよ。じゃあすぐに持って来るわね」
女の子はすぐに店の中に消えた。ピットインには俺達以外にも所謂同業者がいてそれぞれエネルギーの補給をしている。ついでにトラックにもそうしていたりする。
「振られたな」
相棒が笑いながら俺に言ってきた。
「残念だったな」
「ああ、ただのおまじないだからいいさ」
けれど俺は何もない顔で言葉を返した。
「こうして女の子に声をかけるとな」
「何かあるのかよ」
「事故に遭わないんだよ」
この仕事をしてるとどうしても付き物だ。車の事故だけが怖い。

それで俺はいつもこうやっておまじないをしながら仕事をしてるってわけだ。
「声をかけておくとな」
「またそりゃ面白いおまじないだな」
「御前もしてみるか？」
「いや、俺はいい」
けれど相棒は笑ってこう言ってきた。
「もう御守りがあるからな」
「御守りかよ」
「これさ」
応えて胸からあるものを出してきた。見ればそれは十字架だった。ちゃんとキリストもそこにいる。
「これがあるからな」
「へえ、御前結構真面目なんだな」
「神様だけは信じてるからな」
相棒は笑ったまま俺に言ってきた。
「だからさ」
「意外だな。俺は結構いい加減だぜ」
そりゃ天使とかもいるだろうとは思っている。けれど俺にとっちゃさっきみたいに女の子に声をかける方がもっとしっかりとしたおまじないになっていた。
「教会にもあまり行かねえしな」
「そうだろうな。御前はな」
相棒もそれはわかっている感じだった。
「そうだと思うぜ」
「何だよ、わかってたのかよ」
「何年一緒にいると思ってんだよ。わかるさ」
笑顔のまま俺に言ってきた。
「ハイスクール出てから二人でずっとやってるからな」
「それで七年か」

「もうすぐ八年だな」
思えば長い付き合いだ。こいつとはハイスクールで知り合ってからだ。だからかれこれ十年にはなる。それだけ長い付き合いになっていた。
「もうな」
「そうだな。それでな」
「ああ」
「飯はまだかよ」
こう思った時だった。あの女の子が来てその飯を出してくれた。
「お待ちどうさま」
「グッドタイミングだなおい」
俺は今来たメニューを見て思わず言っちまった。
「まだかって思ったところだぜ」
「そういう時に来るのがうちの店なのよ」
女の子は楽しそうに笑って俺達に言ってきた。

第三章

「それがね」
「またそりゃ面白い店だな」
「スーパーマンと同じよ」
今度は誰でも知ってるヒーローを出してきた。
「ここぞっていう時に出るのよ」
「そりゃまた楽しいことで」
「しかも味もいいから。食べてよ」
「わかったぜ。けれどまずかったらな」
「どうするつもりなの？」
「あんたにデートしてもらうぜ」
ここでまた言ってやった。勿論ジョークだ。
「それでいいな」
「まずかったらね」
けれど女の子は自信たっぷりに笑ってこう言ってきた。
「喜んでそうしてあげるわ」
「そうか。じゃあ楽しみにしてるぜ」
俺も相棒もここでまずはその太い小麦のヌードルを口にした。すると。
「美味いな」
「ああ」
思わず言っちまった。これでデートはなくなった。
「いけるな」
「サンドイッチもな」
「じゃあデートはなしね」
女の子も言ってきてくれた。
「残念だったわね」
「まあ美味いものが食えたからな」

「それでよしとするか」
こう言い合って飯を食ってそれからまたドライブをはじめた。相変わらず全速力でかっ飛んでやる。
「おい」
「どうしたんだ？」
「前のポルシェな」
相棒が運転する俺に言ってきた。見れば前に一台ポルシェがいる。
「どうするよ」
「あれか？」
「ああ。どうしてやる？」
「そんなの決まってるだろ」
俺はニヤリと笑って答えてやった。
「抜くんだよ」
「トラックでかよ」
「トラックでポルシェ抜くなって法律なんかあったか？」
笑いながら言ってやった。そのニヤリとした笑みのまま。
「そんなのねえだろ」
「そうだな。じゃあやってやるか」
「よし、見てな」
相棒への言葉だ。その格好だけでとろとろ走ってるポルシェの後ろからかっ飛んでやってそれで横を一気に抜いてやった。わざと右から抜いてやって座席からポルシェを運転してる奴に言ってやった。見たら半端なリーゼントをしてるしけた野郎だった。
「よお、悪いな！」
「トラックがポルシェをかよ！」
「俺のトラックは特別だぜ！」
笑ってこう言ってやってそのまま駆け去ってやった。そのまま飛ばしていく。その中で相棒がまた俺に言ってきた。
「こういうのが楽しいんだよな」
「そうだな」

「三〇〇〇マイルの旅だな」
ふとこう言ってきた。
「長いようで短いか？」
「短いぜ。小さいからな」
俺は鼻歌混じりで相棒に返した。
「アメリカもな」
「小さいか」
「俺達にとっちゃそうだろ」
これが俺の小さいって意味だった。俺達にとっちゃこのアメリカは何処もかしこも庭みたいなものだ。平気で何処にでも行ける。それも気楽に。
だからこう言えた。仕事という建前でこの国の何処にでも行ける。本当にいい身分だ。
けれどないものもある。相棒は今度はそれを言ってきた。
「金はないけれどな」
「ははは、そんなもんどうとでもなるぜ」
俺は相棒のその言葉に笑って返した。
「稼いでな。どうとでもなるさ」
「そうさ」
「そうさ。それじゃあその金を手に入れにな」
「ニューヨークだな」
「このまま飛ばして」
言いながら摩天楼を頭の中に浮かべる。そしてその中心にいるあのレディーも。
「自由の女神のスカートを翻してやるぜ」
「おう、このまま飛ばしてな」
「行くぜ」
俺はさらにスピードを出した。荒野にはまだ先があって街も民家も何も見えない。けれど飛ばしていく。遥かな摩天楼に向かって。

On The Way

完

2009・9・24

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6617k/

ＯＮ　Ｔｈｅ　Ｗａｙ

2010年10月8日15時22分発行